復讐テニス

YUI

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
復讐テニス

【Ｎコード】
Ｎ０４８４Ｚ

【作者名】
ＹＵＩ

【あらすじ】
大事な大事な自分の片割れ。そんな片割れを傷つけられた少女は、奴らに復讐する事を誓った。――氷帝学園で嫌われ・復讐です。苦手な方は避けてください。

＋序章（前書き）

この小説はテニスの王子様の嫌われです。
あなたの好きなキャラが酷い事をするかもしれませんし、されるかもしれません。
そんなの嫌！！と言うお方は読むのをやめてください。
それでもおｋ、と言う方は、下にお進みください。

十序章

――――屋上から飛び降りた。

それをきいたときは、信じることができなかった。

でも、集中治療室に入って眠っているのを見れば、それは現実なんだと理解した。

なんで？どうして？あの子と仲の良い子に聞けば、いじめにあっているそうだった。

――――気づいてやることが、できなかった。

ここまで追い詰めたの？ここまでやったの？ここまで追い詰める必要があったの？

――――――許セナイ。

ねぇ、だって、あなたたちは致命的なミスを犯した。……忘れてない？

――――――私達は、双子なんだよ？

＋話された真実＋（前書き）

主人公が復讐する理由となる真実が語られる話です。
後書きに主人公のプロフィールを掲載しておきました。
それではどうぞ！

＋話された真実＋

こんこんと目の前で眠り続ける双子の片割れ――遊咲(ゆさき)。
昨日会ったときは、笑っていた。そう、笑っていたんだ。
でも今は――ただ、眠っている。

「美咲……」

後ろから名前を呼ばれて振り向くと、そこには景吾がいた。
跡部景吾。跡部財閥の息子で、氷帝学園テニス部部長。彼とは仲がいい。

「景吾……。これ、なに？どういう、こと？」

「……」

「昨日ね、立海に遊咲がきたんだ。その時は、笑ってた。……なのに」

「……とりあえず、ここをでるぞ」

私と景吾は集中治療室を出て、外に出た。
近くのベンチに座り、溜息をついてから、私はまた口を開く。

「あのね……岳人くんに、少し話を聞いたんだ」

「アイツに……か？」

「うん。遊咲、テニス部で……。氷帝学園で、イジメにあってるんだって？」

「……！」

景吾が息をのんでいる。……やっぱり、本当だったんだね。
私は立海大付属中学校に通っている。遊咲は氷帝学園。
わざわざ別になったのは、親に言われたから。よくは分からないけれど。

「ねぇ、景吾、なんで？」

「……美咲」

「なんで……なんで遊咲がいじめられなきゃなんないの？訳わかんない！」

「……」

岳人（がくと）くんは遊咲の1番の友達で、同じテニス部部員。
私が氷帝学園で知ってるのは、遊咲、景吾、そして岳人くんの3人。

遊咲も、そして私も、景吾と岳人くんの事はとても信頼してる。

「……俺達テニス部に、マネージャーが入ったんだ」

「マ、ネージャー？」

「あぁ。名前は成宮（なるみや）ルリ。それに、黒崎真琴（くろさきまこと）」

「……それで？」

「黒崎はよく働く奴なんだ。気立ても良いし、俺も信頼している。だが、成宮は一切の仕事もしてねぇと思う。部活中はずっと俺らの応援ばかりしてるからな」

そりゃしてないね。……成宮か。

でも、その成宮ルリと黒崎真琴に何の関係があるっていうの？

「だがな。成宮は黒崎の仕事を、自分の手柄にしてるんだ」

「は？」

「黒崎のつくったドリンクを、いつも成宮が持ってくる。だから、俺と向日以外の奴は完全に成宮を信用してるんだ」

「……それで？」

「ここからが本題だ。……俺が遊咲から聞いた話だと、その成宮が

遊咲に告白をしたらしい」

「――！」

遊咲が、告白されたんだ……。
なんとなくイメージが出来て、私は少し涙が滲んだ。

「だが、遊咲は断った。遊咲だって本当は黒崎が働いてるのを知ってる」

「……うん」

「でも……成宮はそれを承諾しなかった。何度も何度も遊咲に告白をした」

「……う、ん」

「それでも遊咲は断り続けた。それ以降、成宮は告白をしてこなくなったんだ。あきらめたかと思いきや……アイツはとんでもねぇ事をした」

とんでもない……事？
私は少し体が震えるのを感じながら、景吾の話の続きを待った。

「“自分は遊咲にいじめられた。暴言を吐かれた”なんて事を、テニス部の連中に言ったんだ」

「なっ……！！」

「無論、俺と向日は遊咲を信じた。だが……周りの連中は、成宮を信じた」

「そ、んなの……」

「その日から遊咲はテニス部の連中から暴力や暴言をはかれるようになった。俺と向日も守ったが、２人では到底無理だった」

目の前が、真っ暗になっていくのがわかった。
遊咲、ずっと１人で絶えてたの？なんで私、気付かなかったの？
どうして遊咲は、言ってくれなかったの？
涙がとめどなく溢れた。悲しいんじゃない。……悔しいんだ。

「成宮はさらに事を大きくし、遊咲は氷帝生徒全員からいじめられるようになった。そして……遊咲は今日の昼、飛び降りた」

「……」

「悪い……。俺、アイツを、守れなかった……」

「……ううん、いいの。景吾も岳人くんも何も悪くない。悪いのは……さ」

「美咲……」

「あのね。立海のみんなに、遊咲が大変なんだって言ったら、凄く心配してた。いつしか青学にも情報が行ってて、青学の皆も心配してくれた。他もみんな」

「……あぁ」

「遊咲はテニス強いし、優しいし。……何処へ行っても、人気なんだ。だからさ、そんな遊咲をいじめるなんてさ……」

私は涙を拭いながら、少し笑った。
あぁ、そう。そうなんだ。遊咲をいじめるなんて……。

「――――馬鹿げてる、って思わない？」

「……そうだな」

「ね、景吾。私、決めた。」

「……何をだ？」

完全にぬぐえた涙。……もう泣かない。
だから私はいつも以上に笑って、景吾に言ってみせた。

「成宮ルリに……。氷帝学園に、復讐する」

全ては大事な片割れ……遊咲のために。

＋話された真実＋（後書き）

（　主人公　）

＋名前　葉桜美咲（はざくらみさき）＋

＋性別　女＋

＋年齢　１５歳＋

＋性格　『やる』と決めたら最後までそれを曲げない。気がきく＋

＋容姿　金髪のセミロング。目はちょっとつり目。男の子っぽい顔＋

＋詳細　葉桜家の子供。召使達からもかなり好かれている。
テニスが大好きで、暇さえあればやる。かなり強い。
跡部家とは財閥上知り合っている。かなり仲がいい。
遊咲とは双子であり、互いに大切に思っている。
顔が広く、かなり好かれてもいる。
立海大付属中学校３年生、テニス部マネージャー＋

＋マネージャー業＋

「はじめまして、天宮美咲です」

“この時期に珍しい転校生”と言う中で、私は氷帝学園に編入した。名字を変えたのは、葉桜だといろいろと面倒なことになりそうだから。遊咲のことがまずあるからなんだけど。

「よろしくおねがいします」

好感を引き出せそうな笑顔を作れば、クラスの男共は頬を赤に染めていた。
放課後になれば、私は景吾のいる生徒会室に向かった。そんな時、後ろから肩を掴まれる。

「……岳人、くん」

「やっぱり美咲じゃん！金髪で……その……。遊咲に似てる奴が来たって聞いたから、もしかしたらって思ってさ！」

「うん。名字は天宮に変えてるんだけど、私だよ」

「やっぱりなっ！にしてもなんで氷帝にきたんだ？……いやな思いしか、しないと思うけど？」

そう。岳人くんには復讐の事はまだ言ってない。
だから今はまだ心配かけないように、いつも通り笑った。
昔、演技力をつけられた事がある。
……それが今役に立つなんて、少々助かるな。

「大丈夫だよ。ほら、岳人くん、部活でしょ。早く行かないと！」

「で、でもよ……」

「いいから行く行くー！」

「うわっ、ちょ、ちょっと、美咲！」

とりあえず岳人くんをその場から退散させる。
そして私は一度息をはくと、景吾のいる部屋の扉をあけ、中に足を踏み入れた。

「……ノックぐらいしやがれ」

「あぁ、ごめんなさい。景吾なら分かってるんじゃないかと思って」

「……ったく。で、用件は？」

「聞かなくとも分かっているでしょう？」

「……マネージャーか」

そう。私は、天宮美咲としてマネージャーにしてもらえるように頼みに来た。
もっとも、そうする方が復讐はしやすい。成宮にだって接近しやすいし、一石二鳥だ。

「いいでしょう？ダメって言ってもするけどね」

「じゃあ良いって言うしかねぇだろ。……チッ。体操着きやがって、やるき充分だな。俺様も今から行く。とっとと行くぞ」

「はいはい、跡部部長」

「……鳥肌モノだな」

聞こえない聞こえない。
テニスコートにつくと、早速私の紹介にはいる。
でも、私はただ目の前のやつらを睨みたい気分だった。
……コイツらが、遊咲を苦しめた。
そう思うと、ただただ立っているだけじゃすまないような状態になってきた。

「……天宮、美咲です。一生懸命頑張る、ので、よろしく、お願いします……」

「マネージャーの仕事は、黒崎に教えてもらえ。……黒崎、成宮はどうした？」

「あ……その、ルリちゃんは、体調が悪いから帰るだとか……」

「……そうか」

なんだ。お姫様とやらはいないのか。
私がそんなことを思っていると、眼鏡の奴が口を開いた。

「ルリ……大丈夫かな」

「そうですね。ルリ、つらそうでしたね……」

「ったく。コレも全部、てめぇがルリに仕事おしつけるからだろうが！黒崎！」

「……っ、す、いま、せん」

「おいテメエら！無駄話しねぇでとっとと練習始めやがれ！黒崎と葉……天宮はマネージャー業！」

「……なんやねん、遊咲みたいな奴庇ってたくせになぁ」

「……ほんと、跡部さんの眼力（インサイト）も落ちたんじゃないんですかね」

……こいつら全員、今すぐ殺してやりたい。

むろん、私を見て茫然としている岳人くんと景吾は別だけど。

「……じゃあ、天宮先輩。こっちです」

私は黒崎真琴と共に、部室へ向かった。
到着すると、ドリンクづくり、洗濯など、仕事をしっかりと教えてくれた。
……いい子だな、黒崎真琴は。

「……黒崎、さん？」

「はい、なんですか？あ、分からない事、ありましたか？」

「……ううん。あのね、以前、ここに葉桜遊咲っていたんじゃない？」

その名を出すと、おもむろに黒崎真琴の表情が固まった。

「……遊咲、先輩。いました」

「どう、思ってるのかな？」

「……わた、しは」

黒崎真琴はまっすぐな目で私を見た。
私もその目を真っ直ぐに見て、彼女の言葉の続きを待った。

「私は、遊咲先輩を、……信じてます」

――その言葉だけで、充分だと思った。

ねぇ、愚かな氷帝生たち。
テニス部のメンバーたち。
あなたたちはとても大きなミスを犯してる。
……遊咲は、彼はとても愛されてる。

だから、そんな愚かな君達にね。

――最高の復讐（プレゼント）を、贈ってあげるわ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0484z/

復讐テニス

2011年12月5日20時03分発行